



そしたら「一応承りました」承るだけなんです。「市長はしばらく一切のメール・Twitter・Facebook しませんので」と。相当反響が行ったんだと思います。私は丁寧にやりましたが、いろんな意見もあったんじゃないかと思いますが。

イスラエルの代表は呼ばない。でも、パレスチナの代表は呼んでる。スーダンの代表も呼んでる。市長は平穩・円滑・良いムードの中でやりたいと言ってますが、この結果、G7 が完全に分裂しました。全然平穩じゃない。テロはどんなことがあってもアウトですよ。

時々「いじめられる人にも、いじめられる理由がある」みたいなことを言ういじめっ子、いるじゃないですか。けしからん。いじめるきっかけになった理由はあると思いますが、いじめてもいいという理由はないです。

パリに行って、いろんな人がスリの被害に遭ってますが、取る人より取られる人の方が悪いって、被害者の前と言えますか？

殺人事件が起こった時、殺す人より殺された人の方が悪いってと言えますか？

テロを受けた国に対して、テロをする奴より、テロを受けるような原因をまいてきた国が悪いってと言えますか？言ったのが国連事務総長のグテーレスですよ。

イスラエル国・ユダヤ民族は本当に不思議です

。国を持っていない時は、国を持っていないということで忠誠心を疑われ、国を持ったなら持ったで占領だと憎まれ、金を持ったら持ったで陰謀を働いていると言われ、貧しければ貧しいという理由で、共産主義を考えたのはユダヤ人やろと言われ。結局、何かをしても何もしなくても憎まれるんです。

なぜそんなことになってしまうのかということで、前回、目に見える国際情勢の背後に、目に見えない霊のバトルがあることをお話ししました。

目の前には、ウクライナ戦争やトランプ大統領の暗殺未遂やいろんなことがあるけど、それらの現象の背後には、様々な国や事件を使ってユダヤ人を抹殺させようとしている悪の霊の力が働いている。

なぜユダヤ人は悪の霊の力に狙い撃ちにされるのか。

今日の結論ですが、**ダニエル書**の結論は「世界は最終的にメシア王国という至福のゴールに行きます」という預言です。

メシア王国はメシアの来臨によって初めて実現する国ですが、メシアが来臨する条件は、ユダヤ人がメシアを受け入れることなんです。

その前にユダヤ人が全滅したら、メシアは来たくても来れない。

だから、イスラエルを巡る国際情勢は、単なる世の話やこの世の話題のことじゃなくて、神の人類救済マスタープランに関わってくる問題でもあるんです。

**ダニエル書 10 章 - 12 章**は 1 つの固まりです。

10 章は 11 章 12 章の前章・序章で、ペルシアの君の後にギリシアの君が出てくる。すでにお話ししました。実際の具体的な終末預言は 11 章 12 章で、これを細かく分けると 8 つの未来預言なんです。

今日を「第1部」としたのは、絶対に1回では無理だから。第何部までやんねん？今日は**11章2節**だけ。いつまでやるつもりや！入り出したら早くなるのでね。

最初にざっくり内容を言うと、ペルシア帝国の将来と、それにとって代わるギリシア帝国の勃興が、**11章2節**の1節の中に全部入ってるんです。

今日は**驚異的聖書預言**。聖書がいかにかに信頼に値するか、分かっていたいただければ幸いです。

## ダニエル書 11章

**2「今、私はあなたに真理を告げる。見よ。なお三人の王がペルシアに起こり、第四の者は、ほかのだれよりも、はるかに富む者となる。この者がその富によって強力になったとき、全世界を、とりわけギリシアの国を奮い立たせる。**

ミカエルと肩を並べるくらいの非常に大きな力を持つ、ここでは名前が紹介されていない御使いが言っています。

この今はBC536年です。**10章1節**にキュロスの第三年とあって、これを西暦に換算するとBC536年。

真理は終末預言のこと。終末預言を告げるために、わざわざ神に遣わされて来た。

いつやって来たのか。ダニエルの祈りが立ち上って21日後。

祈ってすぐ、神は御使いを派遣しましたが、この良い御使いがダニエルのところに行くのを通せんぼして、行かさないようにした悪霊の親玉みたいのがいるんです。これがペルシアの国の君。この有力な悪霊が立ち塞がったので、21日間行くことができなかった。でも、ミカエルが来て、助っ人で戦ってくれているので、私は来ることができた。

ここから分かるのは、悪の霊の軍団は、人が聖書預言に触れるのを恐れているということ。ダニエルがこの真理、世の終わり／終末預言を知るのを、なんとしても邪魔したかったのは、彼がこの預言を知ったら、ますます確信を持ちますね。

そして、聞いただけでなく、文書化して**ダニエル書 11章 12章**となりますよね。

文書化したものが最終的に私たちの手にまで下りてきて、私たちはこれを学ぶことができます。

このクソ暑い中、集まってダニエル書を学んでる。聖書を学んでいるということは、実は悪の霊が一番嫌がることなんです。人が聖書のみことばに触れて、正確に理解して確信したら、生き方が変わります。「聖書は全面的に信頼できる」と本気で確信を持つようになったら、私は生き方が変わると思いますねえ。

「こんなん神話や」「俺と関係ないわ」と思っているうちは、読んでてもスーッと頭の上を過ぎ去って行きます。

でも、「これは本当なんだ。私が生きている間にすごいことが起こるかもしれない」と分かっていくことは、悪魔にとっては実に鬱陶しいことなんです。

だから、今私たちがここに集まってやってることは、目に見えない世界では非常に価値ある、意味あることですよ。悪魔が「おまえ、もう黙れ！」「黙るか！」みたいなことなんですね。

### 今、私はあなたに真理を告げる。

今というのはキュロス王の時代です。ペルシアの初代王キュロス、正確にはキュロス2世が王位に就いて3年目、BC536年のこと。

### 見よ。なお三人の王がペルシアに起こり、第四の者は、ほかのだれよりも、はるかに富む者となる。

キュロス王の後に3人の王が出てきて、4人目は、ほかのだれよりも、はるかに富む者となる。

### この者がその富によって強力になったとき、全世界を、とりわけギリシアの国を奮い立たせる。

キュロスから数えて、キュロスを省いて4番目の時に、ペルシアは黄金時代を迎え、ほかのだれよりも、はるかに富む者となる。この4番目の王はクセルクセス王です。クセルクセス王は、ペルシア語でアハシュエロス王。アハシュエロスの奥様がエステルです。旧約聖書の**エステル記**のエステル。

クセルクセス王／アハシュエロス王の時、ヨーロッパを除く全ての大陸がペルシアの手に入ります。南はアフリカ・エジプト・エチオピアから、もちろん今のイスラエル・メソポタミア・インドまで、127州全部ペルシア。押しも押されぬ、面積においても最大限の大帝国になる。それはキュロスから70年後のことです。

キュロス王とクセルクセス王の間に、3人の王が挟まると書いてあるんですね。ところが多くの歴史書では、ペルシア最高の黄金時代を築くクセルクセスは、キュロスから3番目の王なんです。聖書では4番目。一代ずれてるんですよ。今までは、「だから聖書は信用できない」と言われたんですが、そうではない。それを今から論証します。

聖書メッセージをする時、すごくたくさん参考書を利用します。

特に聖書預言はサラッと書いてあって、バックグラウンドが分からないとなかなか掴みきれないんです。それで、ありとあらゆる本を買い集めて、自推としてパソコンの中に入れてたんですけど、盗まれてね。未だに腹が立って仕方がない。



『バイブルワールド 地図でめぐる聖書／ニック・ページ著』は、私が毎回利用している参考書の1つで非常に良い本。お薦めします。聖書関連の専門書を主に出版している「いのちのことば社」から出ています。



彼のライバルはお父さんのキュロスですが、お父さんは死んで、もういない。キュロスは戦争の時、自分はシュシャンの都にいて「おまえら、戦争に行って戦え」と言うのではなく、兵隊と一緒に戦場に立って戦う英雄的な人でした。そのキュロスができなかったことの1つがエジプト平定です。

そこでカンビュセスは、エジプト・エチオピア・アフリカをペルシアのものにしようと平定に行きます。「俺が行く！俺が指揮する！」と、ペルシアを留守にしてエジプトまで行くけど手間取った。やっぱりエジプトは強かったんですね。なかなか陥落せず、時間がどんどん経って行く中で、焦りもあったんでしょう。夢を見たんです。長らく留守にしているペルシアで、弟のズメルディスがクーデターで王位を乗っ取って王様宣言するという夢。

ガバッと起きて、「なんという夢なんだ！留守を守ってくれている弟なのに」ところが、妄想癖がある。いったんそうじゃないかと思うと、その思いがどんどん募ってきて、やがて「ズメルディスが王位を狙っているに違いない！」という確信に変わってしまうんです。カンビュセスは非常に忠実な部下であるプレクサスペスに、「ペルシアに帰って、弟を始末してくれ」言うて。結局、ズメルディスは暗殺されました。

しかし、「長い間王がペルシアを留守にしている間に、ペルシア王家の中でお家騒動があった。弟は殺された」なんてことが周りの国々に漏れてしまうと、どんなトラブルに発展するかもしれない。それを恐れて内緒にしたんです。ズメルディスが殺されたのを知っているのは極々わずかな人たちだけで、ほとんどの人は知らないという状況だったんですね。

ところで、カンビュセスはエジプトでもやりたい放題。妻である妹を連れてエジプトの戦場にいたんですが、ある時、子供のライオンと野良犬が喧嘩を始めたんです。野良犬は成犬ですが、百獣の王だから子供とはいえライオンの方が強い。犬が劣勢になってキャンキャン鳴き出した時に仲間の犬がやって来て、2対1で子ライオンをやっつけてしまった。それを見ていた妻がポロっと涙を流したんですね。その時、「おまえ、なんで泣いた？犬でも強大な敵と戦うためには2対1で戦うのに、人間が、兄が弟を殺すのは獣以下だと思って泣いたんじゃないか？」「いえ、そんなこと、そんなことは…」と言うのですが、即処刑。もうね、おかしいんです。この人。カンビュセスはエジプトに行つて、おかしくなっていくのがエスカレートしている。

そんな中、ズメルディスが亡くなったことを、いの一に知ったマゴスの兄弟がいるんです。マゴスは大統領首席補佐官みたいな人でブレンなんですね。新約聖書の東方の博士たちはマゴスです。占いや医学的知識・占術・外交などいろんなことを知っている学者たち。カンビュセスのマゴスはメディア人でした。メディアはペルシアの上にはいたんですが逆転して、今はペルシアの方が大きい。立場的にはメディアが下です。カンビュセスはちょっとおかしくなってるし、これでエジプトで勝ったら、「俺は

何をやっても許される」とますます傲慢になる。そんな人物が戻ってきたら、多分メディア人を目の敵にして、ペルシア人で固めるだろう。

兄弟でマゴスのメディア人がいて、その1人はズメルディスとそっくりの顔でした。「カンビュセスが戻ってきたら、メディア人は殺される。おまえは顔そっくりやから、偽ズメルディスで王になれよ」そのまま王位に就いて、「私が新しい王だ」と宣告しました。これが3番目の王。そうして、その勅令を早馬に乗せてペルシア中にブワーツと遣わし、新しい王の下で親衛隊を固めて、だれも齒向かえないようにしました。

その早馬が、エジプトにいるカンビュセスのところに着きました。「暗殺のためにプレクサスを送ったのに、しくじったのか？ 返り討ちにあったのか？ ズメルディスが王になるというのは正夢だったのか！」カンビュセスはじっとしてられない。エジプトでの戦争をいったんやめ、軍隊を率いて武力で王位を奪還するということで、ペルシアに戻ろうと、焦って馬に乗ろうとしたその時、剣の鞘が割れて。そして、自分の脛にグサツと突き刺さった。彼は出発できず、しばらく養生のため横になったんですが、そこに菌が入り（今で言う人食いバクテリア）、全身が腐るような病気になって、結局エジプトで亡くなったんですね。

カンビュセスが亡くなって、ズメルディス（偽者）は7か月間、カンビュセスよりよっぽど良い政治をするんですよ。しかし、どうもおかしいと疑う人たちが出てきました。特に7人の非常に位が高い貴族がいて、「本当にズメルディスなのか？ 顔そっくりのマゴスのガウマータじゃないのか？ ガウマータは最近見ないし」

偽ズメルディスは、カンビュセスのたくさんの妻を自分のものにしました。7人の貴族の1人オタネスの娘はその妻だったので、オタネスは「今度ズメルディスに呼ばれたら、本当にズメルディスか確認してくれ」そうしたら、娘が思いがけないことを言うんです。「私はズメルディス様の顔を知りません。弟君だから知らないんです」「ならば、カンビュセスの正妻アトッサ様に聞いてみ」「それもできません」ズメルディスが王位を取った時、彼女は山奥の館に閉じ込められてしまったと。これは、ますますおかしい。

「次呼ばれたら、ズメルディスが熟睡している頃を見計らって、耳を触れ」マゴスのガウマータはキュロスに仕えていた時、ちょっと失敗して、懲らしめということで、怒ったキュロスに両耳を削ぎ落されたんです。ペルシアはブラックとかいう世界じゃない。もうムチャクチャするんですよ。「耳がなかったらガウマータや。耳が付いたら本物や。触ってこい！」触ったら、耳ないねん。間違いない！ こいつニセモンや！ と分かった。問題は、すでに親衛隊が周りをガッチリ固めていたんですね。

オタネスたち7人は、ズメルディスに顔パスで会えるような貴族です。その中のダレイオスが、「偽者と分かったんだし、私たちは顔パスで奥まで行ける

んだから、今すぐ行って、この偽者を刺し殺してしましましょう。彼の首を取って耳がないことを見せつけたら、話はそれで済むじゃないですか！」  
この意見が勝って、宮殿まで行きます。

その時、同時並行で、別の事件が起こっていました。  
偽ズメルデイスが唯一怖いのはプレクサスです。プレクサスが「この人は本物のズメルデイスです」と言えば、変な噂が立つ余地はない。  
それで、「あなたの主人はもう死んでいる。もし私の言うことを聞いて本物宣言をしてくれるなら、あなたを非常に高い位に就けよう」「分かりました」

プレクサスはペルシア中の貴族を集めてバルコニーに立ち、「このズメルデイスは偽者だ！」と言って、投身自殺したんです。つまり「命を掛けた証言です」という意味ですよ。それを言って命を捨てることによって、「これは嘘ではなく本当のことなんだ」ということを、自分の命で立証したわけですね。  
皆がうわっと驚いているところにこの7人の貴族が来て、偽ズメルデイスをやっつけました。

次の4番目はダレイオス。彼はカンビュセスの正妻だったアトッサを妻にします。それによって、自分はキュロスの流れを受け継いでいると。  
そうして、ダレイオスとアトッサに生まれるのが5番目のクセルクセスなんですね。

多くの歴史文書や参考書は、3番目は偽者だから王のリストに入れてないんです。でも、偽者であろうが何であろうが、7か月間はペルシアの王だったので、聖書は王として数えている。  
キュロスの後に、**なお三人の王（カンビュセス→偽ズメルデイス→ダレイオス）がペルシアに起こり、第四の者は、ほかのだれよりも、はるかに富む者となる。**  
この方がより詳しくて正確なんです。

聖書は様々な歴史が発掘されるまでは、不完全な歴史文書で照らし合わせて、「聖書のここが矛盾している」「あそこがおかしい」と言われますが、発掘が進んで新たな資料が発見されるたびに、「聖書って本物なんだな。間違いないんだな。信頼して間違いない書物だ」ということが明らかになるんですね。

**第四の者は、ほかのだれよりも、はるかに富む者となる。この者がその富によって強力になったとき、全世界を、とりわけギリシアの国を奮い立たせる。**

クセルクセス／アハシュエロスは、非常に強力になった時、唯一制覇していないエリアが目についたんですね。ヨーロッパです。  
すでにインドまで治めました。アフリカの方もペルシアの支配下になっている。でも、地中海の西／ギリシアの方は自分たちのものではない。地中海を完全制覇することでペルシアは世界統一する。

クセルクセスはペルシア戦争をします。ペルシア軍 30 万人とペルシア海軍 7 千隻

の軍艦・戦艦でギリシアの国境を突破し、最強だったスパルタ軍と戦いました。スパルタ教育のスパルタですよ。しかしスパルタ軍は全滅し、次々にギリシアのポリスが荒らされていき、このままではギリシアのポリス全滅かと言われたんですが、最終的にサラミスの海戦、海の戦いでペルシアが惨敗して、いったん下がります。

ペルシアは得るものがあまりなかった。ギリシアはもうちょっとで滅びるところが、なんとか踏み留まることができた。あんなに大きな国を相手に痛み分けしたことで、侵略する側より防衛する側の士気が高く、強いことが分かるんですね。全世界を手中に収めようとして、まずギリシアに襲いかかったけど、ギリシアは奮い立って自国防衛に立ち上がり、なんとか食い止めた。

この120年後に、別の人物が出てきます。

**2 第四の者は、ほかのだれよりも、はるかに富む者となる。この者がその富によって強力になったとき、全世界を、とりわけギリシアの国を奮い立たせる。**

**3 一人の勇敢な王が起こり、大きな権力をもって治め、思いのままにふるまう。**

ギリシアの国を奮い立たせる一人の勇敢な王。これはアレクサンドロスです。アレクサンドロスは、20歳の時にお父さんが亡くなって王になりました。王になって最初にしたいと思ったのはペルシア遠征。120年前の仇討ちです。120年前のことに命を掛ける日本人…なかなかそんな感覚はないと思いますが。

アレクサンドロスは、自分の祖先はヘラクレスだと信じてるんです。ヘラクレスはギリシアの神。ギリシアの神とアテネかなんかの女神のハーフ？自分は神と人間のハーフみたいな者だと思っている。これは、創世記6章の墮天使と人間の結婚の話が、違った話で神話の中に入り込んでいるような気がしますね。

20歳から32歳までの12年間、ペルシアを滅ぼしただけでなく、インドまで制覇。大きな権力をもって治め、思いのままにふるまう。大活躍です。ギリシアを出てから一度もギリシアに戻らず、全勝ゼロ敗。一回も負けてない。世界を一つにまとめて、ヨーロッパ・アフリカ・中東アジアを全部、ドラクマという通貨で統一しました。それによって、国境をまたいでも煩雑な両替から解放し、「世界が一つになると、こんなに便利なんだ」というのをやろうとした男です。

彼は自分に恭順を示す者には非常に寛大な政策を取りますが、言うこと聞かへん者には全滅戦争みたいなことをやるんですよ。

このアレクサンドロスにノーと言って、生き延びた民族はユダヤ人だけです。ユダヤ人はペルシアの庇護の下、バビロン捕囚から帰ってきて、税金はペルシアに納めていました。アレクサンドロスはその時の大祭司ヤドアに、「俺はペルシアを滅ぼすから、ギリシアに税金を納めろ」

ヤドアは「神の前に約束したことなので、そんなんできません」と断わったんです。

アレクサンドロスは怒って、「滅ぼすから待っとけ！」

ところが、大軍を率いてツロを滅ぼした後、フェニキアから下ってエルサレムに入ってきた時に、ヤドアの服装を見て、急に戦意喪失したと歴史本に書いてある。

彼はギリシアを出発する時、夢を見ました。夢の中で、「おまえは必ずペルシアを滅ぼす。世界を統一することができる」と告げてくれた人の服装が、大祭司の服装だったんです。ヤドアが大祭司の装束でアレクサンドロスのところに来たので、「あの夢に出て来た人のお姿だ！」ということで心を許したんですね。

その時、ヤドアはどうしたか。「**ダニエル書**にあなた様のことが預言されています」と言って、アレクサンドロスにダニエル書を見せたと言われてるんですね。多分、一部だけ見せたと思います。4節の「その国は彼の子孫のものにならず」という、アレクサンドロスにとって嫌な部分は伏せたと思いますね。ということで、不思議な方法で助かったんです。

今日は2節と3節を見ましたが、聖書は非常に正確な預言書であることを、ぜひ分かっていただけだと思います。

### 最後に**ペテロの手紙第二 1章**

**18 私たちは聖なる山で主とともにいたので、天からかかったこの御声を自分で聞きました。**

これは、イエス・キリストの一番弟子であるペテロが書いた手紙です。イエスがこの地上にいた時、ある高い山に登って姿が変貌し、天の住民であるモーセとエリヤと一緒に話し合っていたという場面が出てきます。聖なる山で主とともにいたので、天からかかったこの御声を自分で聞きました。ペテロは「12弟子の中でも3人しか経験していない、奇跡的な特別な経験をした」と言った後、こう語ったんです。

**19 また私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています。夜が明けて、明けの明星があなたがたの心に昇るまでは、暗い所を照らすともしびとして、それに目を留めているとよいのです。**

また私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています。どんな奇跡的な体験よりも、書かれた聖書のみことばの方がはるかに信頼できる。ペテロが山でイエスの姿を見たのは嘘ではない。本当のことですよ。その経験は素晴らしい。でも、それよりも、さらに確かな預言のみことばを持っています。「どんな奇跡の経験も、聖書のことば以上ではありません。聖書のことば以上に信頼できるものはない」と言ってるんですよ。

私は2週間くらい前に群馬に行きました。ある方が「ずっとYouTubeを見て、イエス・キリストを信じました。でも、少し葛藤があるんです。高原さんはUFOをどう思いますか？」UFO…焼きそばは好きやけど…「僕はそういうのは疎くて」「そう言うと思いました。でもね、私はUFOと交信できるんです」UFOがいつ来るか分かる。来る前に知らせてくれる。そこに行ったらUFOが来る。そして、「あなたは世界平和のために努力しなさい。ある湖に行って、1人で自分で自分にバプテスマを授けなさい」と。それを大真面目に話されるんですよ。

ちょっと困ったな。気を悪くさせずに、どう対応したらいいんだろう。  
お仕事の内容を聞いたら、人工知能の研究をしている。同期とか聞いたら、要は東大出で、単に変な人じゃなかった。今人工知能で引っ張りだこの技術者の一人で、ある YouTube にもチラッと出たことがある。  
そんな方も聞いててくれたのかというよりも、そんな方が UFO と交信してるんか。

その時に開いたのがこの箇所なんです。その奇跡的で個人的な経験はあまりにも強烈だから、譲れないじゃないですか。自分の中では絶対的な真実でしょ。  
でも、その経験が本当に神から来たものかは、聖書と矛盾する内容なのかで検証することができる。

どんなに奇跡的な経験より、さらに確かなのは聖書のことばです。ペテロの場合、彼が経験したことは、確かな聖書のみことばと何も矛盾しませんでした。  
「その経験はなかったとは言えない。でも、どの霊から来たのかは、また別の問題ですよ」ということで、一層深い悩みの中に入ってお別れしました。

### **さらに確かな預言のみことばを持っています。**

聖書の預言に信頼すること、聖書のことばに信頼することが一番安全なことです。

### **暗い所を照らすともしびとして、それ（聖書のことば）に目を留めているとよいのです。**

終末時代、世界はどんどん暗くなり、オカルト的なことや酷い事件とか、パリオリンピックを見てても、世の中どうなってしまうのかと思いますが、そういうところで、手探りするように、何を基準に、何を手掛かりにして生きたらよいのか。  
聖書のことばです。聖書のことばは変わりません。

### **夜が明けて、明けの明星があなたがたの心に昇る**

これは、キリストの携挙のことです。キリストの携挙の時、明けの明星があなたがたの心に昇る。実はすでに信じていても、携挙までは全てが見えているわけではないんです。でも、キリストが来てくださった時、明けの明星のように、自分の中にあったいろんな疑問や不可解なことが全部見えるようになる。  
その時までは、その携挙の決定的瞬間までは、暗い所を照らすともしびとして、それに目を留めているとよいのです。

ダニエル書の預言を通して、聖書が信頼できる根拠を示していますが、聖書が一番伝えたいことはキリストの福音です。「イエスは救い主。あなたを救うために来てくださった方です。そして、また来てくださる方です」と語るんですね。  
ぜひ聖書を通してキリストと出会ってくださいますように。心からお勧めします。

☆\*: .. 0 ..:\* ☆\*: .. 0 ..:\* ☆\*: .. 0 ..:\* ☆\*: .. 0 ..:\* ☆\*: .. 0 ..:\* ☆\*

引用文献；新日本聖書刊行会『聖書 新改訳 2017』いのちのことば社,2017  
ニック・ページ『バイブルワールド 地図でめぐる聖書』いのちのことば社